様式第 14 号　研究内容報告書

研究テーマ	富岡製糸場に勤めた女性たちのライフヒストリー ――昭和期の「あたりまえ」の書き残し（継続）
研究者・団体名	高崎商科大学　職員　川又彩夏
研究要旨	富岡製糸場は 1872（明治 5）年に創業し、操業を停止する 1987（昭和 62）年まで多くの女性たちが働き、生活した場所である。これまでの研究では働いた女性自身に焦点を当て、彼女たちの仕事・生活を記録した。今年度はインタビュー調査の継続のほか、既存の資料や先行研究をもとに、女性たちの仕事や生活の記録について多角的に検討する。これにより、これまでの聞き取りで明らかになった女性たちの姿が個人的な記憶ではなく、富岡製糸場や片倉工業で働く女性たちに共通する経験として捉えることができることを考察した。片倉工業における普遍的な価値だけでなく“富岡ならでは”の記述に向けた展望を検討した。

研究内容

1. 問題背景と目的

本研究の目的は富岡製糸場で働いた女性たちに着目し、当時の仕事や生活の「あたりまえ」を記録することである。特に、本研究では富岡製糸場操業 115 年の歴史の中で、記録や研究の少ない片倉工業期の女性たちに注目している。この時期は、官営期に比べると研究の数は少ないものの、実際に働いた経験を持つ女性やその様子を知る方々が多く健在である。筆者はこれまで 2020 年・2021 年度絹ラボ研究において、8 名の女性や共に働いた男性にインタビュー調査を行った。彼女たちの語りから 2 つの視点を見出し、富岡製糸場と女性たちの関係を次のように捉えた。なお、本稿が対象とする女性たちが働き、生活した場は現在では一般的に富岡製糸場の名で知られているが、当時の正式名称は片倉工業株式会社富岡工場であり、便宜上、本稿では標記を富岡工場で統一する。

① 視点 1 ：つながり

富岡工場で働いた女性たちの多くは先輩の従業員（工員）から仕事や寮生活の過ごし方について教わった。その関係性は姉・母―妹・娘のようでもあった。そのほか、人事担当や募集人といった他部署の男性たちも親元を離れて暮らす彼女たちの様子を常に気にかけていた姿が明らかとなり、あたかも富岡工場が大きな家族のようであったと考えられる。

② 視点 2 ：教え

富岡工場で働く女性たちにとって、そこは労働の場・生活の場・学びの場であった。敷地内に併設された片倉学園での良妻賢母教育の他、定時制高校への通学支援などが行われ、「フォーマルな学び」が提供された。一方で、寮生活の場面では先輩女性従業員が新しく入った女性たちに対し、寮での掃除や洗濯の方法などを教えた。この様子について筆者は「インフォーマルな学び」と位置づけ、富岡工場において、意識的・無意識的な学びの機会が広がっていたことを指摘した。

筆者は、「視点 1 ：つながり」「視点 2 ：教え」から、昭和期の富岡工場がそこで働く女性たちにとって「大きな家族」であり「小さな社会」であったことを意味づけた。そしてここでの経験が、結婚や転職先で活かされていることを踏まえ、富岡工場は次なる社会への架け橋として機能していたと考えられる。

今年度は既存の資料を用いて、片倉工業株式会社に勤めた女性たちの当たり前を多角的に書き出すことに努める。次章以降、第 2 章では、片倉工業株式会社の社内報「かたくら」に注目し、主に昭和 30 年代の各地の製糸工場における女性たちの仕事や生活の様子を検討した。特に 2-1 では量的なデータを、2-2 では誌上に寄せられた彼女たちの語りに注目して質的なデータを取り扱った。この二つを行うことで、片倉工業の女性従業員の実情把握に努め、彼女たちの入社から退社までのキャリアと生活のモデル構築を試みた。第 3 章では本研究の対象である富岡工場に注目する。これまでの富岡製糸場に関する先行研究や筆者が取り組んだ絹

ラボ研究の内容を掘り下げ、第 2 章で描き出した片倉工業に勤めた女性たちの姿との接点を検討しつつ、戦後の富岡工場に勤めた女性たちの姿を描き出す。第 4 章では、まとめとしてこれまで明らかになったモデルを示しつつ、まちなかに散らばる“昭和の工女たち”に関連する記憶に着目することで、“富岡ならでは”の多数の記憶を紡ぎ、物語るための記述に向けた展望を示した。

2. 片倉工業に勤めた女性たちのモデルケースの再構築

まずは片倉工場に勤めた女性の仕事や生活について史資料をもとに整理し、彼女たちの労働と生活のモデルケースを描き出す。本稿で主に使用した史資料は社内報「かたくら」であり、これは片倉工業株式会社が 1953（昭和 28）年から発行したものである。本稿では 1988（昭和 63）年の第 222 号までをまとめた『かたくら縮刷版』を利用した。社内報「かたくら」の発行目的や位置づけは以下の通りである。なお、「かたくら」は一度休刊した時期があるため、創刊時・復刊時それぞれの目的を示しておく。

表　社内報「かたくら」の目的

	創刊時	復刊時
主な読者	管理的な立場の職員	会社の従業員とその家族
目　　的	会社の方針や経営の姿をいろいろな角度からあるがままに知ることで、養蚕業や会社を理解し、経営への協力をする	会社の方針や経営の姿をいろいろな角度からあるがままに知ることで、養蚕業や会社を理解し、経営への協力をする従業員やその家族の人にとってそれなりに役に立つものとする
主な内容	会社の経営状態や繰糸技術に関すること	①事業の内容、製品技術等の説明・紹介　②業界、一般経済の動向、他者・外国製品・技術の説明・紹介　③工場・職場を中心とした記事、家庭・趣味・娯楽関係の記事　④会社からの通達次項、従業員の慶弔・表彰●(1)の消息　⑤その他

（1953（昭和 28）年 9 月 1 日発行「かたくら」第 1 号、1959（昭和 34）年 1 月 25 発行「かたくら」第 18 号より筆者作成）

復刊後の「かたくら」はそれ以前に比べ、工場の生活や従業員一人一人の生活への記述が増え、片倉工業での生活の実態を検討することができる内容であった。このことから、本稿では復刊以降の「かたくら」に注目した。

2-1. 社内報「かたくら」から見る量的な記録

① 女性従業員（工員）の推移について

まずは、片倉工業の従業員数を整理する。1961（昭和 36）年には女性従業員（工員）が全国でおよそ 400 名が新たに採用された。男女別の採用者数では製糸工場における男性の採用はほぼ見られないものの、女性は毎年・各工場で数十名採用されていることが多く、女性の需要が高かったことがわかる。一方で、大宮研究所のような製糸工場以外では女性の採用は少なく男性が多いのが特徴である。

また、1961（昭和 36）年 2 月 1 日に発行された「かたくら」第 43 号によると、女性従業員（工員）の募集は 12 月ごろより行われた。その後、3 月末～4 月ごろには全国の片倉工業の工場に入社し、新生活を迎える。

表　1961（昭和 36）年女性従業員（工員）の採用内訳

工場名	採用人数	工場名	採用人数	工場名	採用人数
㊀	0	㊁	13	㊂	12
㊃	18	㊄	12	㊅	14
㊆	17	㊇	5	㊈	26
㊉	40	平	0	㊊	20
㊋	11	㊌（富岡工場）	61	㊍	26
㊎	14	㊏	16	㊐	9
カ	0	㊑	27	㊒	47

（1961（昭和 30）年 4 月 1 日発行「かたくら」第 45 号をもとに筆者作成）

② 従業員（工員）の出身地について

1961（昭和 36）年 7 月 15 日発行「かたくら」第 48 号によると、東北・中国・四国・九州地方の工場は同地域出身者が主であった。一方、関東・中部地方は、地方から就職した人が多く、特に関東に至っては半数以上が中部・東北等の出身者であった。

③ 従業員（工員）の給料について

片倉工業の給料は基準賃金（基本賃金と諸手当）と基準外賃金（時間外・休日労働賃金等）で構成されて

いた。基準賃金のうち、基本賃金は初任給・年齢給（2 年目以降）・勤続給（2 年目以降）・学歴給（学歴給は中学卒業者は対象外）[(2)]からなる基本給と、自身の能力で決まる能率給からなっていた。女性従業員（工員）の多くが中学卒業者であることを考えると、［基本賃金］初任給 280 円／日+［手当］二交替手当 15 円／日＝259 円／日となる。月 25 日勤務と考え、7,375 円が月給になった（1961（昭和 36）年 7 月 15 日発行「かたくら」第 48 号）[(3)]。ここに能率給が加わるため、実際の支給額は人によって異なる。給料の支払いは毎月 25 日に行われ、税金・社会保険料・食費・組合費等が差し引かれた金額が手元に入ることになっていた。片倉工業は従業員に対し、貯金をすることを勧めており、会社預金を利用し給料から天引きして貯金していた女性従業員（工員）も少なくない。

退職金は、永年勤続者に対して支払われるものであり、基本給と能率給の合計を基礎金額とし、勤続年数によって支給額が決定する。しかしながら、女性は結婚による短期間での退職も多かった。このような点を踏まえ、結婚退職に限り短い勤続者に対しても満額の退職金が払われた。実際、1960（昭和 35）年 12 月 1 日発行「かたくら」第 41 号によると、女性従業員（工員）の大部分が 10 年以下で退職しており、30～40%が 1～3 年で退職した。1960（昭和 35）年における女性の平均初婚年齢は 24.4 歳である。中学を卒業した満 15 歳の少女たちが片倉工業に入社し、10 年勤めると 25 歳～26 歳になっており、この頃の平均初婚年齢を 1 歳～2 歳程度上回る。片倉工業における女性たちの具体的な退職理由は不明であるが、平均初婚年齢を踏まえると結婚による退職であったことが想像できる。

その他、女性の年末年始の帰省の際には片倉工業が往復の旅費を全額負担していた。これは前述の通り地元を離れて就労している場合が多いことが要因の一つと考えられる。

④ 従業員（工員）の業務時間について

工場の作業時間は 1 日 8 時間[(4)]であり、休憩は 1 時間と定められていた。二交替制勤務を導入している工場も多く、従業員の勤務体系は 1 週間ごとに前番・後番に分けられた。

⑤ 従業員（工員）の生活について

片倉工業は創業以来、社宅や寄宿舎制度を設け、工員は全員寄宿舎への入寮を原則とし、規則正しい工場生活を送るよう環境を整えた。入寮者には寝具一式が貸与される。戦後は各工場の寄宿舎自治会によって自主的に運営され、会社が干渉することはなかった[(5)]。

そのほか、社内報「かたくら」において見られた事柄は以下の通りである。

仕事

女性従業員（工員）には、入社後 30 日間の試用期間が設けられた。4 月から 3 カ月間は見習い（養成）期間として業務や生活に必要な教育が行われた。そのため、その間の彼女たちは「養成工」と呼ばれ、養成機関が終了すると「工員」として仕事を任されるようになった。

食

独身の従業員とその他の希望者には工場で食事を給した。費用については給料から天引きされるが、不足分は会社が賄補助費として負担することで、栄養価全国平均 2400 カロリー、タンパク質 80 g と十分な食事が提供された（1961（昭和 36）7 月 15 日「かたくら」第 48 号）。

文化

各工場では、一年に一回程度、演芸会などの文化的な催しが行われた。

娯楽

工場によってその詳細は異なるが、多くの工場で慰安旅行や運動会、盆踊り大会、演芸会等が行われていた。そのほか、仕事後にスイカ割などのレクリエーション（昭和 35 年青梅工場）が行われるなど、季節ならではの行事が開催され、それを楽しむ彼女たちの姿を見ることができる。秋の行楽シーズンになると、「日ごろの苦労を癒し、浩然の気を養う」（1960（昭和 35）10 月 1 日発行「かたくら」第 39 号）べく、工場従業員全員を対象に一泊二日の慰安旅行が行われた。

そのほか、片倉工業は「従業員の体力と明朗な気風を養い生活に潤いを与え、健全な職業人を作るべく」（片倉工業株式会社調査課編，1951，：143）福利厚生の一環として、戦前までは、片倉体操及び大日本国民体操、運動会が行われていた。1946（昭和 21）年以降、女子は卓球やバレーボールを行うことが推奨され、各地区別に労働組合地区協議会との共催による選手権が開催された。工場の垣根を超えた交流としては工場対抗のバレーボール大会があり、富岡工場・東武工場等 4 か所により競い合った記録が残っている。

⑥ 女性従業員（工員）の休日について

定休日は日曜日に定められ、特定休日として元旦（1 月 1 日)、天皇誕生日（当時・4 月 29 日)、文化の日（11 月 3 日)、勤労感謝の日（11 月 23 日)、労働祭（5 月 1 日)、年末年始におよそ 5 日間の休日が定められた。そのほか、①年次休暇　②結婚休暇　③忌引き休暇　④出産休暇　⑤生理休暇　⑥罹災休暇　⑦傷病休暇　⑧隔離休暇　⑨生理休暇が設定された。広報「かたくら」には、休日に映画館やハイキングに行った際の感想などが寄せられている。

⑦ 教育について

片倉工業では創業当初より、女性の教育に力を入れていた。教育の根本理念を「①民主主義を身につけること」「②常識ある職業人となること」「③立派な婦人となること」の 3 点と定めながら、具体的な指導内容や指導方針は年度初めに各学園で開かれる教育委員会で検討された。学習の目標や指導方針は学園ごとに少々異なり、独特な学びが展開された[(6)]。片倉学園には希望する従業員が入学し、1 日 4 時間の授業を受けた。本科 2 年、高等科（研究科）2 年、専攻科 2 年の 6 年間を修了した者には、修了証書または卒業証書が授与される。3 月には卒業式が催され、1960（昭和 35）年までに全国の学園で 1 万数千名が学園を卒業している。

また、学びの場面は学園の中に限った話ではない。川又（2020）が指摘した通り、仕事や寮生活も学びの場面であった。1960（昭和 35）年 6 月 1 日発行「かたくら」第 35 号では、工場教育はあらゆる間に広く浸透させるべきと記されており、幹部をはじめ各指導者が職域を通じて、相互扶助・融和・協調性に富むやり方で常に人間関係を良くする指導をすべきとしている。

2-2. 社内報「かたくら」から見る質的な記録

① 入社時の様子

1963（昭和 38）年の入社式は 3 月 21 日～4 月 1 日の間に開催された。各工場では正門や女子寮に新入生の入社を祝う看板やアーチが掲げられ、歓迎会が開催された（1963（昭和 38）年 4 月 20 日発行「かたくら」第 67 号)。入社初日の様子について以下のように記録されていた。

「そろって元気で」

午前九時少し前、三〇人乗りの小型貸し切りバスが、事務所の前に横ずけされますと、おかっぱ頭の少女が次々に駆け下りてきます。まるではぢき出されるような勢いで。……（中略）……「皆さんようこそお待ちしておりました」。工場長さんをはじめ総出の出迎えです。セーラー服に白いリボン、黄色いカーディガンにスラックスなど思い思いの服装ながら、初めて見る工場に一様にやや緊張の様子です。旅の塵を入浴で落とした後世話係のお姉さんに案内されて食堂へ。心づくしの工場食にやっと穏やかな表情が出るようになりました。真新しい作業服が渡されますと、流石に皆少し照れかげんに、おずおずと手を通します。午後からはそろって安定所の歓迎会に臨みました。……（中略）……元気だとは言え旅の疲れが出たのか八時にはもう静かな寝息が聞こえて来ました。どんな夢路をたどっているのでしょうか。

（1962（昭和 37）年 4 月 1 日発行「かたくら」第 56 号「そろって元気で」）

② 従業員（工員）の出身地について

2-1①で記した通り、地域によって地方出身者の割合にばらつきがあるものの、多いところでは地方出身者が半数を超える工場もあった。このため、新入社員（養成工）の中には、言葉について悩みを感じている人もおり、1959（昭和 34）年 6 月 1 日発行「かたくら」第 23 号の新入社員との座談会では、言葉について以

下のように語っている。

言葉が一番困る

（宮城県出身の養成工）言葉が一番困りました。云うことがわからないといつてすぐにまねをするのです。

（繰糸係）西の方も甲府までゆくとうんと言葉が違つてきますね。

（司会）東北はそれほどでもないが、山形は一寸わかりませんね。……（中略）……言葉のわからないことはたいへん困るでしょうが、すぐに土地の言葉になれるから心配はありません。

（1959（昭和 34）年 6 月 1 日発行「かたくら」第 23 号「はじめての工場生活を語る」）

同様の悩みは 1962（昭和 37）年 7 月 1 日発行「かたくら」にも記述が見られた。ただし、こちらは、司会（工場長）から団体生活の中ではなるべく標準語を使用するよう助言されていた。出身地が異なる人たちによる集団生活のため、言葉については彼女たちにとって不安要素の一つであったことがわかる。

③ 従業員（工員）の給料について

2-1③で記した通り、片倉工業は従業員に対し計画的な貯金を促していた。例えば、天引き貯金を「貯金の奥の手として、堅いのでは一番。否応なしにさせられる職場天引き貯金は最も効果的」（1959（昭和 34）年 10 月 1 日「かたくら」第 27 号）と紹介している。女性従業員（工員）でも天引き貯金をしている人は多くいたようである。給料の使い道は人それぞれだが、1962（昭和 37）年 7 月 1 日発行「かたくら」第 58 号では、新入社員の給料の使い道として、家への送金や夏服の購入、貯金といった内容が挙げられている。

④ 従業員（工員）の生活について

入社 3 か月間（養成工期間）は先輩従業員に生活について倣った。この時の様子について、新しく入った従業員（工員）が入社して何よりうれしく感じたことは「先輩方が親切であったことでした。私たち養成工の部屋には先輩の人が一人づつ部屋長さんとして三か月間いろいろの御世話をしてくれたこと」（「1963（昭和 38）年 9 月 10 日発行「かたくら」第 69 号）だと語っている。

⑤ 従業員（工員）の休日について

休日の過ごし方は人によって異なるが、場内にあるバレーやソフトボール、卓球、テニスなどの施設で楽しむ人もいた。そのほか登山やピクニック、映画館に出かけ、同僚（友人）と感想を語り合うのが楽しみの一つと語る記事も見られ、「お友達と相談して上がった（給料の）分の何割かを生活を楽しむ為に使いたいと、月に一回お料理を作って食べ、一回位いい映画を見、月に一冊本を買うなどと考えてみました」（1961（昭和 36）年 7 月 15 日「かたくら」第 48 号）と生活を楽しんでいた。

寮は一部屋 5～6 人で利用しているが、テレビやラジオ、レコードを聴くこともでき、各自が思い思いの休みを過ごしている様子がわかる（1961（昭和 36）年 7 月 15 日「かたくら」第 48 号）。

⑥ 教育について

社内報「かたくら」には仕事や寮生活、休暇の楽しみなどについて女性従業員（工員）自身の言葉による記事が載せられている（1961（昭和 36）年 7 月 15 日「かたくら」第 48 号等）。中でも仕事をしながら学ぶことに対してポジティブな声を寄せる人も多い。彼女たちの中には家庭の事情で高等学校への進学を断念した人もいた。そのような女性たちは学園ことを以下のように捉えていた。

働き疲れて眠い時など、こんな学園なんてなければ、ゆっくり昼寝でもできるのにと思うことがときどきあるが、そんな考えはその場だけのこの。家庭の事情で進学という夢をすてた私には、働きながら学ぶということは本当にうれしいことだ。もしこの学園がなかったら、どんなにさびしいことだろう。私たちは働きながら学ぶことができるのだ。健康で働きそして学ぶことができるのだ。この上ない幸せ者である。

（1959（昭和 34）年 12 月 1 日発行「かたくら」第 29 号「働らきつつ学ぶ喜び」）

中にはほかの企業に勤める友人から働きながら勉強ができることをうらやましがられるといった声も見られた[(7)]。

しかしながら、働きながらの勉強はけっして容易ではない。時間のやりくりが大きな課題となったことは

想像に難くない。千厩工場で学ぶ女性は当時の生活について「実働八時間を厳格に守りその上社内にある定時制高校での勉強ですから、のんびりしてはいられません。洗濯などは余暇を見つけて、さっさと片づけています。」（1963（昭和 38）年 9 月 10 日発行「かたくら」第 69 号）と振り返った。この語りからも仕事と寮生活と学びの並立のためにも時間の使い方が重要であった様子がうかがえる。

さて、本章のまとめとして、史資料を基に昭和 30 年代を中心とした片倉工業の女性たちの一年間を整理する。

12 月に採用試験を受け、3 月末～4 月に入社し、所長や先輩従業員による歓迎会が開かれた。入社後 1 か月間は試用期間となった。なお、試用期間は採用取り消しが可能な期間である（1961（昭和 36）年 7 月 15 日発行「かたくら」第 48 号）。4 月から 3 か月間は見習い期間（養成期間）であり、「養成工」と呼ばれ、業務や寮生活を身につける期間であった。入社 3 か月後にようやく「工員」と呼ばれるようになった。年間を通じて様々なレクリエーションが開催され、秋には各工場で慰安旅行が催された。年末年始には元旦を含めた 6 日間の休みがあり、実家への帰省費用（往復）は片倉工業が全額負担した。片倉学園に入学する女性従業員は 4 月に入学し、業務の前後に授業を受けた。一年のうち秋ごろ（場合によって 3 月～4 月の新入生入社シーズン）には和裁、洋裁、編み物、手芸、書道、お花など片倉学園で得た技術をもとに作品展が場内で開催され、片倉工業の社員以外にも広く開放されていた。片倉学園での 6 年間の学びを終えると 3 月には卒業式を迎え、晴れて学園を卒業していった。

表　片倉工業における女性従業員の一年間

<table>
<tr><th colspan="2"></th><th>出来事</th><th>立場</th><th>学び</th></tr>
<tr><td>中学3年</td><td>12月</td><td>募集・採用試験</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="12">入社</td><td>3月末～4月1日</td><td>入社式・寮歓迎会</td><td></td><td>片倉学園入学</td></tr>
<tr><td>4月</td><td>寮：大部屋</td><td>試用期間</td><td rowspan="6">1～2年目本科：職業・国語・社会・音楽体操・家庭
3～4年目：高等科（研究科）国語・社会・音楽体操・家庭</td></tr>
<tr><td>5月</td><td></td><td rowspan="2">4月～
養成工（養成期間）</td></tr>
<tr><td>6月</td><td></td></tr>
<tr><td>7月</td><td></td><td>工員</td></tr>
<tr><td>8月</td><td>盆踊り</td><td></td></tr>
<tr><td>9月</td><td>慰安旅行</td><td></td><td>秋ごろ：作品展示</td></tr>
<tr><td>10月</td><td></td><td></td><td rowspan="6"></td></tr>
<tr><td>11月</td><td>運動会、演芸会</td><td></td></tr>
<tr><td>12月</td><td>クリスマスパーティー</td><td></td></tr>
<tr><td>1月</td><td>年末年始休暇（6日）</td><td></td></tr>
<tr><td>2月</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>3月</td><td>養成工　寮：部屋替え</td><td></td><td>片倉学園卒業式</td></tr>
</table>

（「かたくら」をもとに筆者作成）

3. 富岡工場における記録の整理

本章では、既存の富岡製糸場研究や川又（2021・2022）をはじめとする昨年度までの絹ラボ研究によって明らかになったデータをもとに富岡工場での女性の労働や生活について整理する。

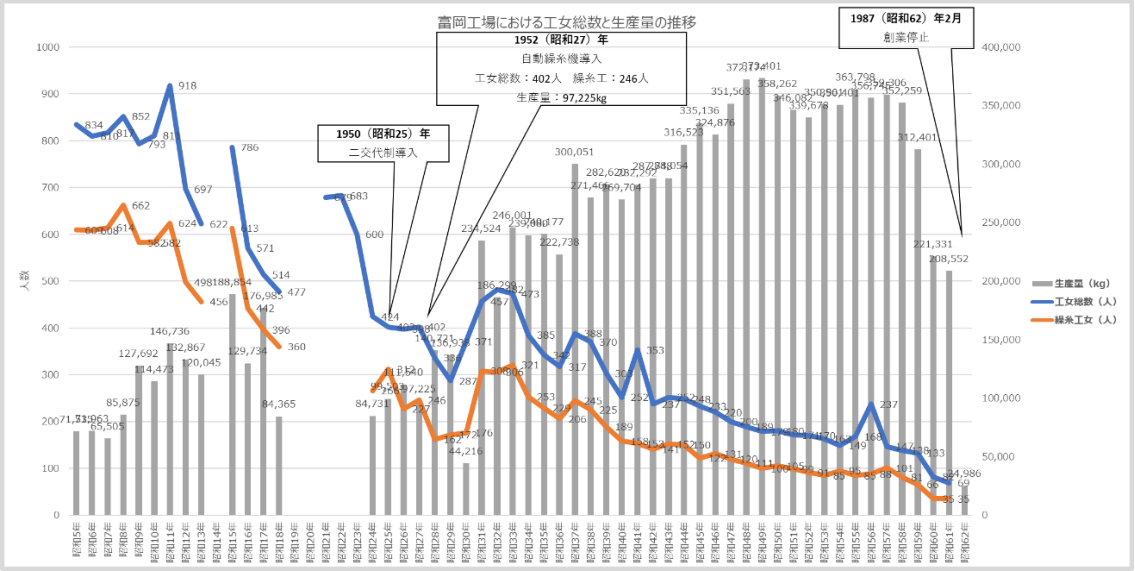
① 従業員（工員）の推移について

まずは、富岡工場の全体像を把握するために、女性従業員（工員）富岡工場における女性従業員の数について改めて整理したい。

戦前の 1930（昭和 5）年から富岡工場が操業を停止する 1987（昭和 62）年の女性従業員数の推移は表のとおりである。戦後 1945（昭和 20）年以降、女性従業員（工員）の数は 1947（昭和 22）年にはピークの 683 名を迎えたが、以降全体的に減少傾向となり、1974（昭和 49）年には 100 名になり、その 2 年後には 100 名を切る状態にあった[(8)]。

この間、1950（昭和 25）年には二交替制の勤務形態が導入されたり、自動繰糸機が導入される等、より効率的な生産体制がとられるようになった。この結果、女性従業員の数が減りながらも生産量を増やし続け、

表　富岡工場における工女総数と生産量の推移



（今井（2022）をもとに筆者作成）

1974（昭和 49）年には 373,401kg の生糸生産量を記録した。

② 従業員（工員）の出身地について

富岡製糸場は官営期より各地から製糸工女を受け入れていた。特に、官営期は模範学校としての役割があったことから、彼女たちの出身地は全国に及ぶ。そのため、東北や新潟県出身者が多く富岡工場に就職した印象があるが、戦後の富岡工場は必ずしもそうではない。富岡工場における 1961（昭和 36）年の出身地割合はグラフの通りであり、少なくともこの時期は県内出身者が多かったことがわかる。

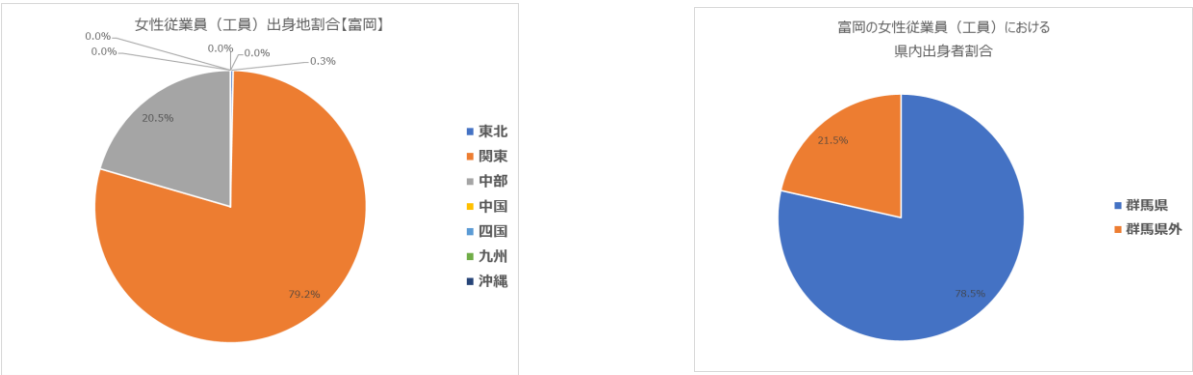


図　富岡工場における出身地割合

（1961（昭和 36）年 7 月 15 日発行「かたくら」第 48 号より筆者作成）

③ 従業員（工員）の給料について

2-1③で検討した時代と少々異なるが、1974（昭和 49）年の入社案内によると、中学卒業の女性従業員の差し引き手取り月額は 33,628 円であり、内訳は表の通りである。

中学卒業者の給料(1974（昭和 49）年)

月給		控除	
初任給	41,000	税金	420
交替手当	3,750	社会保険料	2,802
合計	**43,750**	食費	6,900
		合計	**10,122**
差し引き手取り月額			**33,628**

（1974（昭和 49）年社内案内をもとに筆者作成[9]）

④ 従業員（工員）の業務時間について

富岡製糸場の労働時間は時代により異なる。官営期の労働時間は平均 7 時間 45 分であり、民間に払い下げられて以降は少しずつ延び最長で 13 時間となった（富岡市，2020）。

片倉工業期では、1950（昭和 25）年に二交替制が導入され、前番は 5:25 始業・13:55 終業（うち 45 分休憩）、後番は 13:55 始業・22:30 終業（うち 50 分休憩）であった（今井，2013）。なお、1794（昭和 49）年の入社案内に掲載されている就業時間の前番は 5:00 始業・13:30 終業（うち 1 時間休憩）、後番は 13:30 始業・22:00 終業（うち 1 時間休憩）であったことから、その

形態が見直されていたことがわかる。

⑤ 従業員（工員）の生活について

全国の片倉工業の女性従業員（工員）は場内の寄宿舎で規則正しい生活を送っていた。これは富岡工場も同様である。山田（2020）によると、1939（昭和 14）年に片倉工業（当時は片倉製絲紡績株式会社）に経営が移ってからはそれまで利用されていた鏑寮（1896（明治 29）年建設）に加え、妙義寮（1940（昭和 15）年建設）、浅間寮（1940（昭和 15）年建設）を建設し、女性従業員の寄宿舎として利用した。寄宿舎の割り振りは二交替の勤務割り振りをもとに行われ、普通の勤務形態者が鏑寮、二交替のある A 組が浅間寮、B 組が妙義寮に分かれた[10]。

前番・遅番の就業時刻

	1950（昭和25）年				1974（昭和49）年			
	始業時間	終業時間	休憩時間	実働時間	始業時間	終業時間	休憩時間	実働時間
前番	5:25	13:55	45分	7時間45分	5:00	13:30	1時間	7時間45分
後番	13:55	10:30	50分	7時間45分	13:30	22:00	1時間	7時間45分

（今井（2013）・1974（昭和 49）入社案内をもとに筆者作成）

富岡工場の寄宿舎は「片倉富岡寄宿舎自治会」によって運営され、「寄宿舎の秩序を維持し健康で文化的な団体生活」（1972（昭和 47）年「寄宿舎規則」）を送るよう定められた。寄宿舎規則では、集団生活において他人の私生活を侵さないよう起床就寝時間、食事時間、消灯時間などが表のように決められていた。

表　1972（昭和 47）年の女性たちの一日（平日）

<table>
<tr><th>前番</th><th></th><th></th><th>後番</th></tr>
<tr><td colspan="2">起床・点灯</td><td>4:30</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2">始業</td><td>5:00</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2">朝食</td><td>7:30</td><td colspan="2">起床・点灯</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="6">業務</td><td>8:00</td><td colspan="2">朝食</td></tr>
<tr><td>8:30</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>9:00</td><td colspan="2" rowspan="2">片倉学園
（午前の部）</td></tr>
<tr><td>11:20</td></tr>
<tr><td>11:30</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>12:30</td><td colspan="2">昼食</td></tr>
<tr><td>13:00</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2">終業・昼食</td><td>13:30</td><td colspan="2" rowspan="7">始業
・
業務</td></tr>
<tr><td rowspan="3">片倉学園
（午後の部）</td><td></td><td>14:30</td></tr>
<tr><td></td><td>16:00</td></tr>
<tr><td rowspan="4">入浴</td><td>16:30</td></tr>
<tr><td>16:50</td></tr>
<tr><td>夕食</td><td>17:15</td></tr>
<tr><td rowspan="3">片倉学園
（夜間の部）</td><td>18:30</td><td colspan="2">夕食</td></tr>
<tr><td></td><td>19:00</td><td colspan="2" rowspan="3">業務</td></tr>
<tr><td></td><td>20:50</td></tr>
<tr><td colspan="2">就寝・消灯</td><td>21:00</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td rowspan="3">入浴</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>22:00</td><td>終業</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>22:30</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>23:00</td><td colspan="2">就寝・消灯</td></tr>
</table>

（1972（昭和 47）年寄宿舎規則をもとに筆者作成）

これまでの筆者が取り組んだインタビューでは、昭和 50 年代に働いた女性たちの口からは、寮生活があわただしかった様子が語られている。例えば、前番勤務の際は勤務規定時間よりも早い 4:45～4:50 頃に繰糸所に行き、就業準備を行っていた[11]。前番で定時制高校に通う人は、勤務が終了したのちに通学し、寄宿舎に戻ってから就寝するまでの 20 分間に歯磨きや次の日の用意などを済ませなくてはならなかったという[12]。そのようなせわしない生活だからこそ、先輩女性従業員（工員）の時間の使い方を見て学び、自身も身に付ける必要があったのだろう。2-2⑥で記した他工場でも時間の使い方がポイントとなる点から、富岡工場はもちろんのこと、片倉工業に勤める女性たちに共通する姿であると言えよう。

⑥ 従業員（工員）の休日について

これまでのインタビューでも昭和 30 年代に富岡工場に勤めた女性たちは空き時間に片倉学園で学んだ洋裁技術で自分や家族のために洋服を作っていた。また、その洋服を着て一ノ宮貫前神社やピクニック、富岡市中心市街地の映画館[13]に行くことなどが楽しみであったという語りも印象的である。そのほか慰安旅行、組合の旅行、寮の旅行もそれぞれ年 1 回行われていたと語っている。一方、昭和 50 年代に勤めた女性たちからはこのような話はあまり見られない。慰安旅行等の福利厚生の変化については今後の研究課題である。昭和 50 年代に勤めた女性たちは娯楽室のテレビを見ることや寮の自室で漫画を読んだり音楽を聴いたりすることを楽しんでいたという[15]。その他、商店街で化粧品や洋服を買うのが楽しみだったと語り、時には上信電鉄を利用し高崎駅周辺のデパートに洋服を買いに行くこともあった[16]。

富岡工場と他の工場で共通する点は慰安旅行やまちなかの映画館に行く姿であった。しかしその詳細は社内報「かたくら」ではあまり見ることができなかった。富岡製糸場は富岡市中心市街地に位置し、近くには城町通り、宮本町通り、銀座通りなどの商店街が存在することから、まちなかの住民が彼女たちの様子を記憶していることも多い。このようにまちなかで遊ぶ姿は富岡工場ならではの姿であろう。

4. まとめと今後の展望

本研究では、片倉工業が発行した社内報「かたくら」や「入社案内」、「寄宿舎規則」などの史資料や先行研究をもとに、昨年度までの研究で明らかになった語りをより多角的に捉えることを試みた。これにより、昨年度までのインタビュー内容が単に語り手一人一人の個別的な記憶でなく、片倉工業に共通する記憶であったことが示唆された。本研究により、女性たちのライフコースという視点から以下のような特徴を描き出すことができた。

- 中学校を卒業し、同じ年の 3 月末～4 月に入社し、先輩従業員・同期との寮生活をスタートさせる。
- 二交替勤務を実施する場合、寮の部屋は勤務体系ごとで分けられた。
- 入社後 3 か月間は養成工として、先輩従業員（工員）に倣い仕事や寮生活について身に付けていった。
- 仕事以外の時間を片倉学園や定時制高校での学びにあて、立派な職業人や良い妻・母になるべく知識や経験を深めたり、高校の学びや部活動に取り組んでいた。
- 入社後 10 年程度で退職。平均初婚年齢を踏まえると、結婚による退職と考えられる。

これまで製糸工女研究の多くが明治期をはじめとする戦前のものであり、その年代と比べると、昭和期の仕事や生活について十分な検討がなされてこなかった。そのため、富岡製糸場を含む製糸工場はしばしば「女工哀史」のようなネガティブな印象を持たれてしまう場合もある。しかしながら、本研究で戦後の富岡工場について知見を深めることで、そこで働く女性たちが忙しくも生き生きと暮らしている姿が明らかになってきた。一方で、これらは片倉工業の製糸工場で働く女性たちに共通する姿でもあり、“富岡ならでは”という点では引き続き検討を続ける必要がある。例えば、これまでのインタビューやまちなかのフィールドワークで彼女たちが商店街で買い物する姿や地域の祭りを楽しむ様子が見えてきた(17)。さらには敷地内に社宅があることから、社宅の子どもとその友人が場内を自由に遊び回ることも記録されている（シルクカントリーぐんま連絡協議会，2016）。商店主の中には自身が子どものころに納品のために富岡工場を訪れたことを記憶している人もいる。これらは富岡製糸場の近くに商店街が複数存在していることによるものであろう。このような地域とのつながりは社内報「かたくら」から見出すことができなかった。“富岡ならでは”の姿を描き出すためにも片倉工業の資料を検討しつつ、まちなかの商店主らの記憶にアプローチする必要がある。昭和期の女性たちのイメージを構築することで、富岡製糸場で働く女性像のバージョンアップや富岡観光における新たなコンテンツを検討する材料になると考える。

注

(1) 資料の文字がつぶれており、確認できなかった。

(2) 中学卒業者は学歴給対象外だが、片倉学園への出席奨励とその為の能力向上に対して支給されることもある。

(3) 初任給は年々改善され、1963（昭和 38）年 9 月 1 日発行「かたくら」第 69 号では中学卒業女子の初任給は 10,868 円（26 日計算、含二交替手当）となったと記載されている。そのほか、賞与は年 2 回（額はその都度決定）支給され、毎年 1 月から定期に昇給が行われる。

(4) 1961（昭和 36）年までは 7 時間 45 分勤務であったが、この年の 6 月 15 日から 8 時間に改められた（1961（昭和 36）年 6 月 1 日発行「かたくら」第 47 号）。

(5) 寮の運営に関し、片倉工業が干渉することはないものの、適切な助言はなされていた。

(6) 1960（昭和 35）年 6 月 1 日発行「かたくら」第 35 号では、大宮学園（大宮工場）では「経済生活への心得」を養うための「出納簿づけ」が、瑞浪学園（瑞浪工場）では退職するまでに自分の布団を作る「ふとん作り」が行われる等、各学園で工夫がなされている様子が示されている。

(7) 1961（昭和 36）年 7 月 15 日発行「かたくら」第 48 号では、以下のような様子が語られた。『ある日中学の時の親友からの便りに「あなたは働きながら勉強ができて幸せですね。今度あったらお互いに少しでも成長しているように頑張りましょう」とありました。私はこのお友達に負けずに努めたいと思います。』

(8) グラフのうち、欠けている部分は資料がなく数字がわからない部分である。
(9) 初任給 41,000 円+交替手当 3,750 円を足すと 44,3750 円となり、差し引き手取り金額は 34,628 円となるが、本稿ではパンフレットの記載通りに示す。1,000 円の誤差が何に起因するかは定かではない。
(10)2020 年 9 月 15 日実施した昭和 30 年代に務めた女性でのインタビューでは当時の寮について以下のようであったと語られた。
榛名寮…1 階はアイロン部屋（寮生がアイロンをかけることができる部屋）／2 回は事務員の部屋
鏑寮…A 組・B 組の両方の寮生が生活している寮（前番・後番が混在する）
浅間寮…A 組のみ（前番・後番のいずれかしか生活していない）
妙義寮…B 組のみ（前番・後番のいずれかしか生活していない）
ただし、これについては史資料や先行研究から十分な確認が取れておらず、今後の課題とする。
(11)2020 年 12 月 26 日実施インタビューより。
(12)2021 年 12 月 23 日実施インタビューより。
(13)1876（明治 9）年に現在の銀座通りに中村座（芝居小屋）ができて以降、1918（大正 7）年には富岡座（活動写真館)、1919（大正 9）年には富岡電気館（映画館)、1949（昭和 24）年には富岡東宝（映画館)、1953（昭和 28）年には東宝（映画館）と中央劇場が設立された。
(14)2020 年 9 月 15 日実施インタビューより。
(15)2020 年 12 月 26 日実施インタビュー、2021 年 12 月 23 日実施インタビューより。
(16)2020 年 12 月 26 日実施インタビューより。
(17)2020 年 12 月 26 日実施インタビューより。まちなかの七夕まつりに友達と参加したり、現在の富岡どんと祭りの踊り連に参加したという。このインタビュー以外にも城町通りに店を構える商店主から富岡どんと祭りの際は片倉工業の女性たちに城町通りの住民が踊りを教えるために場内に入ったと語っている。祭り当日は城町通りと同じデザインの浴衣に「かたくら」と記した浴衣を纏い、ともにパレードに参加したと語る。これらの語りについては、資料などで確認ができておらず、今後の課題となる。

参考文献

榎一江『近代製糸業の雇用と経営――郡是製糸の経営手法と工女の労務管理を解明』（吉川弘文館・2019）
今井幹夫「富岡製糸場の経営実態に関する一考察」富岡市『平成 24 年度富岡製糸場総合研究センター報告書』（富岡市・2013）
今井幹夫『富岡製糸場の研究　前編』（群馬県文化事業振興会・2022）
今井幹夫『富岡製糸場の研究　後編』（群馬県文化事業振興会・2022）
片倉工業株式会社編『かたくら縮刷版』（片倉工業株式会社・1988）
片倉工業株式会社調査課編『片倉工業株式会社三十年誌』（片倉工業株式会社調査課・1951）
菅野和夫「工場法施工百周年に寄せて」厚生労働省，厚生労働』（日本医療企画・2016）
シルクカントリーぐんま『平成 27 年度「富岡製糸場と絹産業遺産群」調査研究――富岡製糸場に関する聞き取り調査』（2016）
富岡市・岡野雅枝編『富岡製糸場――継承される革新の歴史』（2020）
富岡のまち編さん委員会編『富岡のまち』（富岡市教育委員会・2014）
山田智子「富岡製糸場における女子寄宿舎の建設構成の変遷と女性労働者の生活環境――鏑寮、浅間寮・妙義寮を中心に」『富岡製糸場女性労働環境等研究委員会報告書』（富岡市・2020）
富岡市「富岡製糸場を中核とした文化観光拠点計画」.
内閣府「平成 16 年版　少子化社会白書（全体版)」
片倉工業株式会社富岡工場「社内案内」（1974）
片倉工業株式会社富岡工場・片倉富岡寄宿舎自治会「寄宿舎規則」（1972）